



TEAM

15

TEAM:
TOKYO WONDER SITE
EMERGING ARTISTS ON
MEZZANINE

MIHOKANNO

TEAM
15

TEAM:
TOKYO WONDER SITE
EMERGING ARTISTS ON
MEZZANINE

MIHOKANNO

Hello! MIHOKANNO

TOKYO WONDER SITE
EMERGING
ARTISTS ON
MEZZANINE

TEAM
15

TEAM: TOKYO WONDER SITE
EMERGING ARTISTS ON MEZZANINE
15
MIHOKANNO

Hello! MIHOKANNO



MIHOKANNOの活動について、とやかく分析をして、変なレッテルを貼りたくないという気持ちと同時に彼らの活動の持つ意味をしっかりと把握したいという気持ちとが共存している。それは、彼らが心優しい共同体として、現代の社会の個人として生きることと、共同性を持つが故にこそ生きてゆけることの大切さを改めて感じさせてくれるからなのだ。個の確立と共同性の確立とが相反するものとして立ち現れるここ日本において、彼らの個の発見と確立への希求と共同性の発見は、私には希望すら感じさせる。彼らのグループの活動は、あるテーマや戦略に基づいたものでもなく、ただのお遊びの仲間とも違う。彼らはアーティストとして生きることを決めたときから、同級生として出会った他者との関係の中に、自分とは何者なのかを探していった。MIHOKANNOの活動は目的的でなく、中心化と権威化など全く視野になく、ひと括りにされる何かに拘いとられることなく、固定的な意味や意義を生成せずに、両義的で多層的な世界を生成しつづけている。彼らはその活動にこそ、この世界のリアルを感じ取っているのだろうし、それに比べて手ごたえのない薄っぺらな日常世界の方がまるで仮説の世界のようだと感じていることだろう。

人間は生きてゆく時に、必ず社会を作りださないと生きてはゆけない。しかし現代において個を確立することと同時に共同性を確保することが、あまりにも難しいことになってしまっている。それは既存の地域社会の共同体の崩壊と共同体共有のエンシクスの喪失という社会現象のみならず、境界例の増加に見られるように、社会との関係、他者との関係がうまく結べない状況に追い込まれているのである。「個」の追求は常に逆説的に「共同性」の在り方の追及でもあると言えるだろう。歴史的に見ても、日本あるいはアジアの西洋化という近代化の奥に潜むものは、個と共同性のあり方の相克の歴史と言い換えることすら可能だろう。そして日本においては、個が社会からの絶対的な距離を確保し、個を隔離することによって、個の確立を目指す道が多く試みられてきた。現代においても「オタク」に代表されるようにタコつぼ的な個に埋没することによってしか、個をつなぎとめることができない状況は変わっていないと言えるだろう。しかし、そのように社会と切り離れること（デタッチメント）によって個を描き続けていた村上春樹がアメリカ滞在の後に、社会と関わること（コミットメント）によって逆に自己を発見する道を見つけたように、私たちは自分たちの手で、個と社会あるいは共同性との新たな関係を発見しなくてはならないだろう。その時、個の周りには、もはや社会、世界あるいは共同体と呼ばれるものではなく、共同性、あるいはコレクティブと呼ばれる、ゆるやかなものであるだろう。MIHOKANNOの活動は、そのような共同性やコレクティブなことへの可能性や希望を垣間見せてくれる。だから私たちは彼らの初の展覧会と一緒にやりたかったし、今回のプロジェクトでそのことを少しでも多くの人たちと語り合い、発見してもらいたかった。それが今、生きるために一番大切なことだと思うと同時に、日本のアートシーンにとって重要なことだと思うからである。

When it comes to MIHOKANNO, I want to avoid dissecting their work for dissection's sake and slap some awkwardly fitting label on them, while at the same time I want to truly grasp the meaning of what they're up to. Part of that's because they live both as individuals in modern society and as members of a gently collaborative unit, and part of that is because they remind me how important it is to make collaboration with others a central part of our lives. In Japan, where we often see our establishment as individuals as running contrary to the establishment of our communality, I dare to say I find hope in how their aspirations toward individual discovery and establishment coexist with their discovery of communality. Their activity isn't based on some guiding thesis or strategy, nor is it simply a case of friends at play. From the time that they decided to live their lives as artists, they began a search to find themselves through their relationships to the people they knew first as classmates, and now as collaborators. MIHOKANNO is not objective-oriented, nor aimed toward some kind of consolidation or authority-mongering, nor has any idea or ideal scooped them up and bound them together like a uniform bundle of sticks. Instead, they create a multi-layered dual-meaning world while avoiding any easy labeled meaning or significance. They sense and find the "real" of this living world in their communal correspondence. This ephemeral, practical day-to-day life must seem, to the contrary, to be a tentative and hypothetical world.

Man cannot live without making society. And yet, modern society has made it far too difficult for us to maintain both our individuality and our communality. This is not solely due to the collapse of community in regional societies and social phenomena like the loss of a shared ethic between communities. As it becomes increasingly easy to find borderline cases around us, it grows more difficult to form relationships to society and relationships to others. The search for the 'self' is paradoxically also the pursuit of a way to be 'communal.' From an historical perspective as well, Japan's—or, indeed, Asia's—westernization under the auspices of modernization, can be said to be a history of the struggle between individuality and communality. In Japan, countless attempts have been made to establish the individual by maintaining the individual's absolute distance from society, a separate entity. We're still piecing together our individuality by burying ourselves in our own foxholes in the fashion of the otaku. Yet one of the more famous illustrators of the individual as detached from society, Haruki Murakami, back from a long stint in the U.S., seems to have discovered a new way of expressing the self through a commitment to society. Like him, we must discover new connections between self and society, or self and communality. When we are able to do this, we will find ourselves not part of a society, or milieu, or community, but surrounded instead by something gentler—call it communality or collectivism. MIHOKANNO's art gives us a glimpse of the hope and potential for this kind of communality and collectivism. That's why we wanted to be a part of their first exhibition—to create a dialogue and encourage discovery—because that's the most important thing in our lives, and a vital part of Japan's art scene.

新たな個と共同性の関係を求めて

今村有策 | トーキョーワンダーサイト館長／東京都参与

Finding a New Relationship Between the Individual and the Group

Yusaku Imamura | Director, Tokyo Wonder Site
Counselor on Special Issues to the Governor, Tokyo Metropolitan Government

寄せ集め時代のマニフェスト

片岡真実 | 森美術館チーフ・キュレーター

20世紀には多くの芸術運動やイズムが生まれたが、そのなかには特定の集団活動と密接な関係にあったものも少なくない。例えば、イタリアの詩人マリネッティが「未来派主義創立宣言」をフィガロ紙1面に発表したのは、ちょうど100年前の1909年。マリネッティ、33歳の年である。機関車や自動車など産業革命の進むヨーロッパで、自動車を「サモトラケのニケよりも美しい」とし、都市に施された新たなスピード感と騒音を賛美するその思想は後にファシズムに向かって行ったが、同時代の多くのアーティストが賛同した。また、1924年には詩人アンドレ・ブルトンが「シュルレアリスム宣言」(第一宣言)を発表。新しいイズムを「口頭、記述、その他あらゆる手段で思考の真の過程を表現しようとする純粋な心的オートマティスム」と定義したブルトンは28歳だった。また、1960年代にニューヨーク、ヨーロッパそして日本からも多くのアーティストが参加したフルクサスの主宰者ジョージ・マチューナスは、1963年に「フルクサス・マニフェスト」を発表。「ブルジョアの病、「インテリ」、専門家、商業化された文化を世界から追放せよ。死んだ芸術、模倣、見せかけの芸術、抽象芸術、幻想的な芸術、数学的な芸術の世界、——ヨーロッパ主義の世界を追放せよ!」という宣言は、アートと生活、アンチ・アート、ノン・アートといった言葉を通して芸術をすべての人々へ開放しようとする姿勢を提示した。マチューナス32歳の年である。社会に向けて、あるいは既存の芸術概念やそれを構成するシステムに対して宣言されたこれらの提言が、当時の新しい時代感覚を反映したものであることは、例示した3つのマニフェスト宣言者の30歳前後という年齢からも窺い知ることができる。

1990年代以降は、現代アートにおける特定の運動もイズムも見出すことが困難な時代と言われてきた。欧米主導の美術史を世界が共有した時代から、多文化主義以降、文化的な多数の傍流によって主流は喪失し、傍流の集合体によって世界のアートが成り立つようになった。そのなかで、特定の運動と運動していたアーティストのグループ活動も珍しくなったと感じていたが、近年、日本の新しい世代のアーティストから集団活動がいくつも見られている。これまでも見られたカップルやユニットとしてではなく、個人での活動と併行して存在する集団、あるいはグループ単位でアーティストとしてのアイデンティティを持つ。リーダー的存在の有無もまちまちで、グループ発生の経緯も、大学時代の同級生など自然発生的な場合が多い。そして、集団活動をする肝心の意味は、特定の思想や観念に裏付けられたのではなく、きわめて感覚的で抽象的なものが彼らの特徴といえるだろう。

「MIHOKANNO」もまた、これらの新世代グループ活動の一例である。もともとは2006年にバンクアートを借りて展覧会をするために団体名が必要とされ、「菅野美穂」が好きという共通点のために「MIHOKANNO」となった。リーダー格はなく、多摩美術大学時代の同級生から派生した。バンクア-

トでの展覧会以降、メンバーチェンジを経て、今回のトーキョーワンダーサイトでの展覧会には9名で参加しているが、その存在はむしろ文集や同人誌的な冊子を通して認知されてきたという。年齢は30歳前後。冒頭の例を考えれば新しい世代観から生まれるマニフェストがあっても良いところだが、それは無い。

MIHOKANNOの一部はスタジオも共有している。1990年代、中山ダイスケを中心に立川にあった「スタジオ食堂」もスタジオの共有に始まっているが、MIHOKANNOは彼らを意識はしていない。「昭和40年会」も同じ年に生まれただけというその繋がりゆえに1994年以来、15年も続いているが、平成新人類など新しい世代を象徴した彼らも今や40代半ばの中年アーティスト。MIHOKANNOから見れば「大人の集団」だ。同世代としては「Chim ↑ Pom」のようなグループもあるが、その社会的な課題への意識や体当たりの姿勢もMIHOKANNOには見られない。では「MIHOKANNO」とは何なのか？

「共同で何かを起こしたいという人たちは確実にいるはず」、「何かをやりたいというふつふつとした感情はある」という彼らの言葉からは、どこかリアルでフィジカルな繋がりを求めている世代の感覚が窺える。その集団活動は社会に対するメッセージの提言という外向的なものではなく、自分を取り囲む社会における自身の存在を模索したむしろ内向的な活動にも見える。大量の情報やイメージがインターネットを介して得られる時代、コンピュータのモニター越しに見知らぬ人とも繋がるソーシャル・ネットワークではなく、気心の知れた仲間と何らかの問題意識を共有すること、あるいは大学という枠組みを離れてなお、他者との間で感じられる精神的な繋がりを求めているのかもしれない。本展にもメンバー数人が共同で制作した作品が出品されているが、その芸術的価値は未知数だ。むしろ、共同作業を通じた思考と制作のプロセスに価値があるという点が良い。

アーティストの集団活動は、それが何らかの思想で繋がれている場合にはその相違によって、リーダーの訴求力に依っている場合にはその喪失によって、またスタジオなどの環境を共有する場合にはその環境の変化によって自ずと終焉に向かう。いわば継続に意味があるのではなく、何らかの精神を共有して暫定的に繋がってられるその時間に意味があるということか。現代は、全く新しいオリジナルな何かなどもはや創出できないと言われる時代であり、むしろ断片化した膨大な情報や既存イメージをリミックスしながら新しい価値を見出す時代である。「MIHOKANNO」もまた、アーティストとしての個人活動の一断片を切り取って、他のメンバーのそれと寄せ集め、個人からは生まれない別の価値をそこに求めている。言い換えれば、「MIHOKANNO」とは、現代の精神を寄せ集めた暫定的アッサンブラージュのような集団であり、その寄せ集め時代の精神性を社会に顕在化するための感覚的で抽象的なマニフェストを提示しているのかもしれない。

片岡真実 (かたおか・まみ / 森美術館チーフ・キュレーター)

A Manifest in the Age of Aggregation

Mami Kataoka | Chief Curator, Mori Art Museum

The Twentieth Century saw its share of artistic movements and –isms, many of which bore an intimate and direct connection to the specific activity of a group of artists. Go back a hundred years to 1909, for instance, when the Italian poet Marinetti published his *The Founding and Manifest of Futurism* on the front page of *Le Figaro*. Marinetti was 33 at the time. In a Europe where locomotives and automobiles were the poster children of the industrial revolution, he called the automobile “even more beautiful than the Victoire de Samothrace.” This artistic reverence toward the ever-increasing speed and noise of the city was later to lead toward fascism, yet many artists of the age agreed with Marinetti’s assessment. Then, in 1924, the poet André Breton published his *Surrealist Manifest* (the first). At the age of 28, he defined this new –ism as “psychic automatism in its pure state, by which one proposes to express—verbally, by means of the written word, or in any other manner—the actual functioning of thought.” In 1960s New York, George Maciunas held his Fluxus event—attended by many artists from Europe and Japan, which came with its own Fluxus Manifesto, published in 1963. In this, the 32-year-old Maciunas called for freedom for art itself, through ideas of art and life, anti-art, and non-art, saying, “Purge the world of bourgeois sickness, “intellectual”, professional and commercialized culture, purge the world of dead art, imitation, artificial art, abstract art, illusionistic art, mathematical art—purge the world of ‘Europanism’!” These manifests, typically directed at society or existing artistic norms and establishment, reflected a new awareness of their age—as can be seen in the relative youth of their authors.

After the 1990s, we enter an age where it becomes difficult to identify any particular movements or –isms in contemporary art. Having gone through a time when the world shared a ‘main-stream’ of art mostly created in Euro-American region, contemporary art in our multicultural age has transformed into a multitude of cultural peripheries or sub-streams that have converged into a far more complex and complicated artistic aggregation. While it had seemed as though artist groups whose work was linked to a particular movement had grown rare, in more recent years, several groups are being emerged amongst the new generation of artists in Japan. These are not the artist couples and art units we saw before, but individuals who marry their individual work with that of a group, and those who only as a group have an artistic identity. Some of these groups have identified leaders, while others do not, but most sprang naturally from other associations—classmates in university, for example. What gives their work as a group its meaning is not a particular ideology or guiding concept, but a more intuitive, abstract quality.

MIHOKANNO is one such group from the newest generation. Lacking a name when they

rented BankArt for an exhibit in 2006, they chose MIHOKANNO because of a shared appreciation for the actress Miho Kanno. This group formed from classmates at the Tama Art University, with no designated leader. After the BankArt show and a change of members, 8 artists and 1 designer exhibited at Tokyo Wonder Site this time as MIHOKANNO—though they are known more for their writing and presence on the *dojinshi* fan mag scene more than for their art at present. All the members are around thirty years old. Following the historical pattern we saw above, we might expect a manifest for a new generation to emerge from this group, but there is nothing so far.

Though some members of MIHOKANNO share a studio, they don’t see themselves as following the pattern of Daisuke Nakayama’s Studio Shokudo in Tachikawa, which also existed as a shared studio in the 1990s. Another artist group, named “The GROUP 1965” simply due to the fact that they shared the same birth year, has been going a full decade and a half since 1994, yet these symbols of a new era in their day are now all artists in their mid-forties—a group of established artists, from where MIHOKANNO sits. In the same generation as MIHOKANNO we find groups such as Chim Pom, but the awareness of social problems and whole-body dedication of the latter is absent from the former. So what is MIHOKANNO, exactly?

They themselves say there “must be people out there who want to make things happen together,” they can sense a “simmering feeling of wanting to do something”—both statements evidence of a generation that yearns for a real, physical connection to each other. Their activity as a group doesn’t serve as a message to the outside world, rather, it is an inward-looking process of discovering the nature of one’s own existence within society. Perhaps, in this age where a vast volume of images can be had in the blink of an eye via the Internet, they are looking to share a common awareness among intimate friends—not the pale substitute of social networks connection people who don’t know each other through computer screens. Or perhaps they are looking to maintain that feeling of psychological connection to their peers they enjoyed in school, now that they have left the framework of the university. This exhibition featured some collaborative works by several members, though their artistic worth is as yet unknown. What is known is the value of the creative process and thought that goes into these collaborations.

When a group bound by shared ideals finds those ideals changing; or when a group formed around an inspirational leader loses that leader, or when a group that shares a studio or other working environment sees that environment change, they naturally fall apart. There is less importance attached to persisting, and more importance seen in the temporary connection maintained while that common spirit exists. It is widely thought that nothing truly original is possible in our current age. Instead, ours is an age of finding value in the remixes of fragmented information and the vast pool of pre-existing images. MIHOKANNO seeks to find value in breaking off each individual’s work and compiling it with that of the other members to create something that one artist could not create alone. We might say that MIHOKANNO is a provisional assemblage, compiling parts of the contemporary spirit. In this way, they may have already given us an intuitive, abstract manifest for actualizing the spirit of an Age of Aggregation within society today.

COBRA

松原壮志郎 | Soshiro Matsubara



福永大介 | Daisuke Fukunaga



FLASH
2009
油彩、キャンバス
Oil on canvas



展示風景:「TEAM 15 MIHOKANNO "Hello! MIHOKANNO"」トーキョーワンダーサイト渋谷、2009
Installation View: TEAM 15 MIHOKANNO "Hello! MIHOKANNO" Tokyo Wonder Site Shibuya, 2009

Untitled
2009
油彩、キャンバス
Oil on canvas



Untitled
2009
油彩、キャンバス
Oil on canvas



台の下にオオカミ
wolf under the board
2009
油彩、キャンバス
Oil on canvas



犬の様に歩き回った偉大な男
A great man who wandered around like a dog
2009
油彩、キャンバス
Oil on canvas



火の絵
Fire painting
2009
油彩、キャンバス
Oil on canvas



松、其ノ五十八
Pine No.58
2009
ミクストメディア
Mixed Media



Vacance
2009
映像
Video





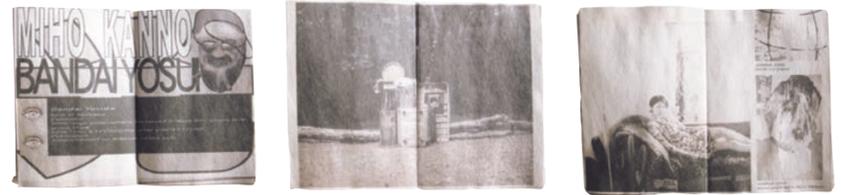
miho
kannok

HELLOW

MIHOKANNO BOOKS



2009, 200pages, b/w, Edition of 50, 210x297mm



2007, 104 Pages, b/w, Edition of 30, 92x60mm,

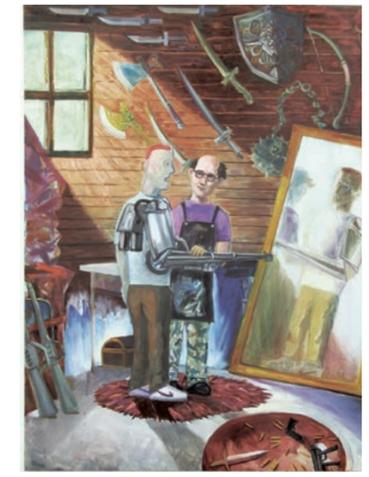
COLLABORATION



FM(福永大介、松原壮志朗)
FM(Daisuke Fukunaga, Soshiro Matsubara)
空
Sky
2009
油彩、キャンバス
Oil on canvas



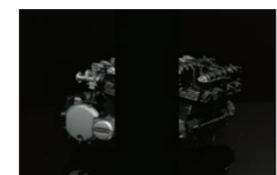
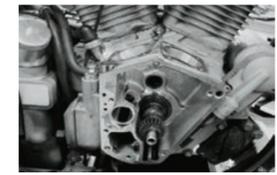
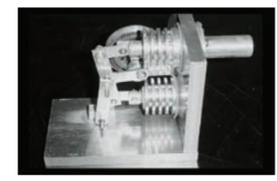
FM(福永大介、松原壮志朗)
FM(Daisuke Fukunaga, Soshiro Matsubara)
昆虫図鑑
insect-collecting
2009
油彩、キャンバス
Oil on canvas



FM(福永大介、松原壮志朗)
FM(Daisuke Fukunaga, Soshiro Matsubara)
武器屋
Weapon shop
2009
油彩、キャンバス
Oil on canvas

万代洋輔、COBRA
Yousuke Bandai, COBRA

連続失恋
Continuous heartbreak
2009
映像
Video



榎倉冨香、大城絢
SaeKa Enokura, Aya Ohki

コリー
Korry
2009
映像
Video



千葉正也、山本修路
Masaya Chiba, Shuji Yamamoto

松、其ノ五十七 立体作家の肖像画
Pine No.57 Portrait of Sculptor
2009
FRP、油絵具、他
FRP, oil and others

「アートシーン」という言葉の意味は解るがそれがどこにあるのか、正直あまり実感がない。
 いったい何処にあるんだろう？
 何にせよ、そういうものが必要だった。
 一番信用できたのは、実際、今、隣で描いている(つくっている)奴だ。
 僕らに必要な事とは他にも必要な人がいるに違いない。

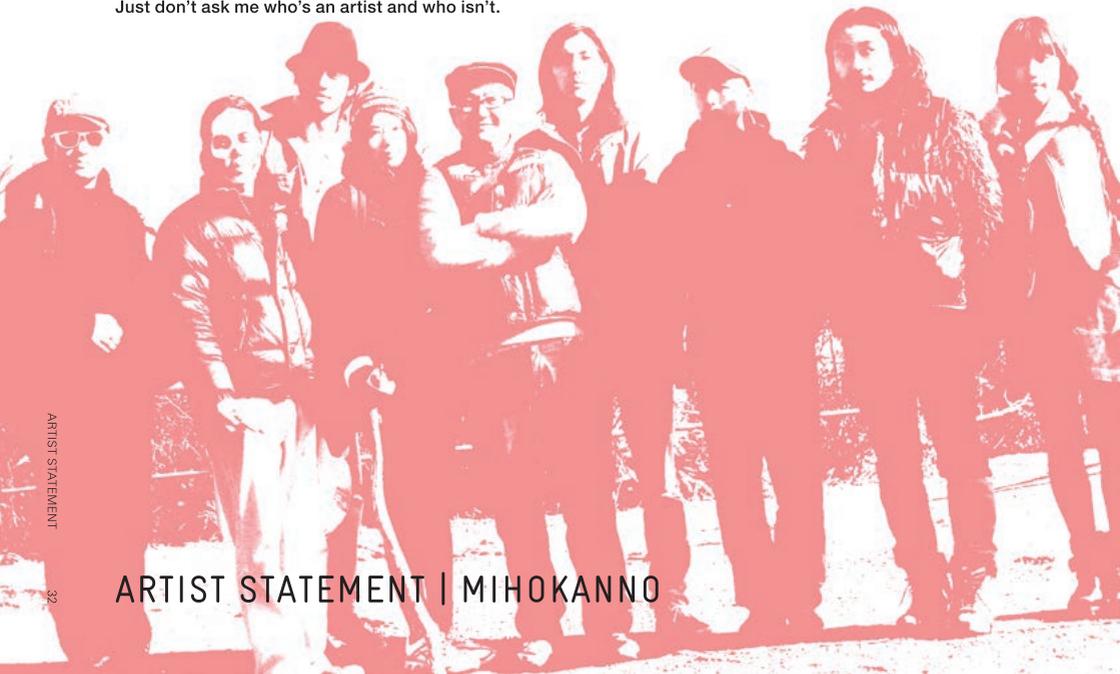
今回の展覧会はいわゆる言葉による「キュレーション」はしていない。
 僕らは言葉よりもずっと前にイメージを掴まされる。
 展示会場では作品を介した意志の交流の跡が見てもらえと思う。
 日々の無駄話が正しかった事をここで証明したい。

願わくば、アーティストの友達が欲しい。
 誰がアーティストで誰がアーティストで無いのかもよく解らないが。

While I understand what is meant by the words "art scene," I have to admit,
 I'm not really sure where this art scene is to be found.
 I mean, where is it?
 That we needed it is beyond questioning.
 After all, what can I trust more than the guy drawing (creating) right next to me?
 And if we needed it, there're other people who need it too.

We haven't done any verbal or textual 'curation' for this exhibition.
 We apprehend images so much quicker than words, anyway.
 I think you'll see traces of our exchange of creative ideas in the artwork.
 I hope it proves just how right we were to spend those days in idle banter.

What we want are friends who are artists.
 Just don't ask me who's an artist and who isn't.



ARTIST'S PROFILE

万代洋輔

1980 島根県生まれ
 東京都在住

個展	2007	「reunion」ヒロミヨシイ、東京
	2006	「High atmospheric pressure ↑」BankART Studio NYK、神奈川
グループ展	2008	「After the Reality 2」Deitch Projects、ニューヨーク 「New York Photo Festival」70 Front Street Gallery、ニューヨーク 「Vrishaba through Mithuna」ヒロミヨシイ、東京 「FAXINATION」LOYAL、ストックホルム 「ETRO ART CIRCUS」代々木オリンピックプラザ、東京
	2007	「tinyvices」colette、パリ / The Gallery Soho、ロンドン / Projectos Monclova、メキシコシ ティー / White Flag Projects、セントルイス / La esquina Gallery、カンザスシティ 「THE EXPOSED/LIFE OVEREXPOSE」CASO、大阪 / PUNCTUM、東京 「SECRET PHANTOM」MAGIC ROOM?、東京

Yosuke Bandai

1980 Born in Shimane
 Lives and works in Tokyo

Solo Exhibitions	2007	"reunion," hiromiyoshii, Tokyo
	2006	"High atmospheric pressure ↑," BankART Studio NYK, Kanagawa
Group Exhibitions	2008	"After the Reality 2," Deitch Projects, New York "New York Photo Festival," 70 Front Street Gallery, New York "Vrishaba through Mithuna," hiromiyoshii, Tokyo "FAXINATION," LOYAL, Stockholm "ETRO ART CIRCUS," Yoyogi Olympic Plaza, Tokyo
	2007	"tinyvices," colette, Paris / The Gallery Soho, London / Projectos Monclova, Mexico City / White Flag Projects, Saint Louis / Laesquina Gallery, Kansas City "THE EXPOSED/LIFE OVEREXPOSE," CASO, Osaka / PUNCTUM, Tokyo "SECRET PHANTOM," MAGIC ROOM?, Tokyo

ARTIST'S PROFILE

千葉正也

1980 神奈川県生まれ
2005 多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業
神奈川県在住

個展 2008 「ミツ境」シュウゴアーツ、東京

グループ展 2007 「ritual」TEAM09 千葉正也」トーキョーワンダーサイト渋谷、東京
2006 「4人展」シュウゴアーツ、東京
「福武ハウス in 越後妻有アートトリエンナーレ2006」新潟

Masaya Chiba

1980 Born in Kanagawa
2005 Graduated from Department of Painting, Oil Painting Course, Tama Art University
Lives and works in Kanagawa

Solo Exhibitions 2008 "Mitsukyo," ShugoArts, Tokyo

Group Exhibitions 2007 "ritual" TEAM09 Masaya Chiba," Tokyo Wonder Site Shibuya, Tokyo
2006 "Four Artists Show," ShugoArts, Tokyo
"FUKUTAKE HOUSE," Echigo-Tsumari Art Triennial, Niigata

ARTIST'S PROFILE

COBRA

1981年生まれ

個展 2006 「tail to tail」BankART Studio NYK、神奈川

グループ展 2008 「Oコレクションによる空想美術館—magical museum tour 第3室「内田耕造・栗山齊・COBRAの部屋—幻想のHOTEL magical」」トーキョーワンダーサイト本郷、東京
2007 「WORM HOLE episode MIHOKANNNO」magical, ARTROOM、東京
2006 「WORM HOLE episode 4」magical, ARTROOM、東京

COBRA

Born in 1981

Solo Exhibitions 2006 "tail to tail," BankART Studio NYK, Kanagawa

Group Exhibitions 2008 "Imaginary Museum of the O-collection – magical museum tour Room 3: Kozo Uchida, Hitoshi Kuriyama and COBRA – the imaginary HOTEL magical," Tokyo Wonder Site Hongo, Tokyo
2007 "WORM HOLE episode MIHOKANNNO," magical, ARTROOM, Tokyo
2006 "WORM HOLE episode 4," magical, ARTROOM, Tokyo

ARTIST'S PROFILE

榎倉 冴香

1982 東京都生まれ
 2005 多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業
 東京都在住

個展	2008	「Ballads」space23°C、東京
	2005	「TAKAHE」space23°C、東京
グループ展	2008	「Vrishaba through Mithuna」hiromiyoshii、東京
	2007	「WORM HOLE episode MIHOKANNO」magical, ARTROOM、東京
	2006	「INDEX#2 Life Style」トーキョーワンダーサイト本郷、東京 / art project room ARTZONE、京都

Saeka Enokura

1982 Born in Tokyo
 2005 Graduated from Department of Painting, Oil Painting Course, Tama Art University
 Lives and works in Tokyo

Solo Exhibitions	2008	"Ballads," SPACE23°C, Tokyo
	2005	"TAKAHE," SPACE23°C, Tokyo
Group Exhibitions	2008	"Vrishaba through Mithuna," hiromiyoshii, Tokyo
	2007	"WORM HOLE episode 'MIHOKANNO'," magical, ARTROOM, Tokyo
	2006	"INDEX#2 Life Styles," Tokyo Wonder Site Hongo, Tokyo / art project room ARTZONE, Kyoto

ARTIST'S PROFILE

福永 大介

1981 東京都生まれ
 2004 多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業
 神奈川県在住

個展	2008	「Local Emotion」小山登美夫ギャラリー、東京
	2006	小山登美夫ギャラリー、東京
グループ展	2009	「VOCA展」上野の森美術館、東京
	2008	「After the Reality2」Deitch projects、ニューヨーク 「Vrishaba through Mithuna」ヒロミヨシイ、東京
受賞歴	2009	絹谷幸二賞

Daisuke Fukunaga

1981 Born in Tokyo
 2004 Graduated from Department of Painting, Oil Painting Course, Tama Art University
 Lives and works in Kanagawa

Solo Exhibitions	2008	"Local Emotion," Tomio Koyama Gallery, Tokyo
	2006	Tomio Koyama Gallery, Tokyo
Group Exhibitions	2009	"VOCA exhibition," Ueno Art Museum, Tokyo
	2008	"After the Reality2," Deitch projects, New York "Vrishaba through Mithuna," hiromiyoshii, Tokyo
Awards History	2009	Koji Kinutani Prize

ARTIST'S PROFILE

松原 壮志朗

1980 北海道生まれ
2005 多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業
東京都在住

個展	2008	「Missing Mass 3」space23°C、東京
	2007	「Missing Mass 2」ヒロミヨシイ、東京 「Missing Mass」ヒロミヨシイ、東京
	2005	「Soshiro Matsubara solo exhibition」ヒロミヨシイ、東京

グループ展	2008	「Vrishaba through Mithuna」ヒロミヨシイ、東京 「FAXINATION」LOYAL、ストックホルム
	2006	「After the Reality」Deitch Projects、ニューヨーク
	2005	「Zone-Poetic Moment」トーキョーワンダーサイト本郷、東京 「Gallery Artist Show」ヒロミヨシイ、東京
	2004	「After the Reality」ヒロミヨシイ、東京

Soshiro Matsubara

1980 Born in Hokkaido
2005 Graduated from Department of Painting, Oil Painting Course, Tama Art University
Lives and works in Tokyo

Solo Exhibitions	2008	"Missing Mass 3," space23 , Tokyo
	2007	"Missing Mass 2," hiromiyoshii, Tokyo
		"Missing Mass," hiromiyoshii, Tokyo
	2005	"Soshiro Matsubara solo exhibition," hiromiyoshii, Tokyo

Group Exhibitions	2008	"Vrishaba through Mithuna," hiromiyoshii, Tokyo "FAXINATION," LOYAL, Stockholm
	2006	"After the Reality," Deitch Projects, New York
	2005	"Zone-Poetic Moment," Tokyo Wonder Site Hongo, Tokyo "Gallery Artist Show," hiromiyoshii, Tokyo
	2004	"After the Reality," hiromiyoshii, Tokyo

ARTIST'S PROFILE

大城 絢

1983 福岡県生まれ
2005 多摩美術大学美術学科絵画学科油画専攻卒業
東京都在住

個展	2008	ミルウォーキー・アートフェア、ミルウォーキー 「大城絢」ヒロミヨシイ、東京
----	------	--

グループ展	2006	「After the Reality」Deitch Projects、ニューヨーク 「秋山幸、大城絢」ヒロミヨシイ、東京
	2004	「After the Reality」ヒロミヨシイ、東京

Aya Ohki

1983 Born in Fukuoka
2005 Graduated from Department of Painting, Oil Painting Course, Tama Art University
Lives and works in Tokyo

Solo Exhibitions	2008	Milwaukee Art Fair, Milwaukee "Aya Ohki," hiromiyoshii, Tokyo
------------------	------	--

Group Exhibitions	2006	"After the Reality," Deitch Projects, New York "Miyuki Akiyama, Aya Ohki," hiromiyoshii, Tokyo
	2004	"After the Reality," hiromiyoshii, Tokyo

ARTIST'S PROFILE

山本修路

1979 東京都生まれ
 2005 多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業
 東京都在住

個展	2008 「松景 其ノ貳」ラディウム-レントゲンヴェルケ、東京
	2007 「PINES」PH GALLERY、ニューヨーク 「松 from Lammfromm」ラムフロムザコンセプトストア、東京
	2005 「松景」ヴァイスフェルト-レントゲンヴェルケ、東京 「松景」絵馬、東京

グループ展	2009 「掌9」ラディウム - レントゲンヴェルケ、東京
	2006 「百花撩乱」ボイスプランニング、神奈川 「Landschaft」ヴァイスフェルト-レントゲンヴェルケ、東京 「Aランチ」 AXISギャラリー、東京

パブリックコレクション 十和田市現代美術館、青森

Shuji Yamamoto

1979 Born in Tokyo
 2005 Graduated from Department of Painting, Oil Painting Course, Tama Art University
 Lives and works in Tokyo

Solo Exhibitions	2008 "SHO-KEI II," Radi-um -Roentgenwerke, Tokyo
	2007 "PINES," PH GALLERY, New York "MATSU from Lammfromm," Lammfromm the concept store, Tokyo
	2005 "SHO-KEI," weissfeld-Roentgenwerke, Tokyo "SHO-KEI," Ema, Tokyo

Group Exhibitions	2009 "TANAGOKORO 9," Radi-um -Roentgenwerke, Tokyo
	2006 "Hyakkaryouran," BOICE PLANNING, Kanagawa "Landschaft," weissfeld-Roentgenwerke, Tokyo "A-Lunch," AXIS Gallery, Tokyo

Public Collection Towada Art Center, Aomori

TEAM:
 TOKYO WONDER SITE
 EMERGING ARTISTS ON
 MEZZANINE

15

MIHOKANNO

展覧会

TEAM 15 MIHOKANNO 「Hello! MIHOKANNO」
 会場：トーキョーワンダーサイト渋谷
 会期：2009年5月30日（土）→7月20日（月・祝）
 主催：財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト
 協力：小山登美夫ギャラリー、シュゴアーツ、ヒロミヨシイ、
 レントゲンヴェルケ AG、magical, ARTROOM

カタログ

編集人：家村佳代子
 編集：吉田雄一郎
 翻訳：株式会社オフィス宮崎
 写真：万代洋輔、MIHOKANNO
 デザイン：寺井恵司
 印刷：大東印刷工業株式会社
 発行：財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト
 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山SOUTH棟3F
 発行日：2009年12月15日

Exhibition

TEAM 15 MIHOKANNO "Hello! MIHOKANNO"
 Venue: Tokyo Wonder Site Shibuya
 Date: May 30 (Sat.) → July 20 (Mon., Holiday), 2009
 Organizer: Tokyo Metropolitan Foundation for History and
 Culture, Tokyo Wonder Site
 Cooperated by: Tomio Koyama Gallery, ShugoArts,
 hiromiyoshii, Roentgenwerke AG,
 magical, ARTROOM

Catalogue

Editor: Kayoko Iemura
 Editorial Staff: Yuichiro Yoshida
 Translation: Office Miyazaki Inc.
 Photo: Yosuke Bandai, MIHOKANNO
 Design: Keiji Terai
 Printing: DAITO INDUSTRIAL PRINTING CO., Ltd.
 Published by: Tokyo Metropolitan Foundation for History and
 Culture, Tokyo Wonder Site
 COSMOS Aoyama SOUTH 3F, 5-53-67 Jingumae,



TEAM

Tokyo Wonder Site:
 Emerging
 Artists on
 Mezzanine

トーキョーワンダーサイトでは、2000年より始まったトーキョーワンダーウォール（主催：東京都）との連携や国内外の芸術文化機関、ギャラリー等とのネットワークを通じて、若手アーティストを継続的に支援しています。本シリーズTEAMでは、TWS本郷の展示で頭角を現してきたアーティストなど特に実力派の若手を選出しTWS渋谷にて展示を行います。タイトルのMezzanine（＝中2階）には、この展示をきっかけに、彼らが活躍の場を国際レベルのフィールドへと一段かけあがることへの期待が込められています。

Tokyo Wonder Site has been putting great effort into the continuous support of young artists, in affiliation with the Tokyo Government-hosted "Tokyo Wonder Wall" (launched in 2000), and as part of a global network of galleries and other cultural facilities. For each installment of this "TEAM" series, we have been selecting talented, up-and-coming artists and other creators who distinguished themselves in exhibitions at TWS Hongo, to exhibit their works at TWS Shibuya. "Mezzanine" in the title reflects

Tokyo Wonder Site

Institution of Contemporary Art and
International Cultural Exchange, Tokyo

トーキョーワンダーサイトは、東京から新しい芸術文化を創造・発信するアートセンターです。東京都の公募展トーキョーワンダーウォールと連携したプログラムを中心に、様々な分野の若手支援・育成を行うTWS本郷。国際的な文化ネットワークのハブとして国内外の文化機関と連携しながら、若手から国際的に活躍するアーティストまでが発表・交流を行うTWS渋谷。さらに2006年にTWS青山:クリエイター・イン・レジデンスをオープンし、ジャンル・国籍をこえたクリエイターがプロセスを共有しながら制作する場となっています。3館でプログラムを連携しながら、新しい創造の拠点として多岐にわたる活動を展開していきます。

Tokyo Wonder Site is an art center dedicated to the generation and promotion of new art and culture from the heart of Tokyo. While TWS Hongo supports and nurtures young talent in all fields in programs related to the government-hosted "Tokyo Wonder Wall" exhibition of works chosen from among entries from the general public, TWS Shibuya is a hub in a global cultural network of affiliated cultural facilities in Japan and abroad, and at once a platform for both new talents and internationally active artists to exchange and showcase their works. In addition, TWS Aoyama: Creator-in-Residence opened in 2006 as a venue for creative individuals from all genres and nationalities to pursue their respective work in a shared process. Through various joint programs, the three venues will continue their broad array of artistic activities in order to provide artists with a stage for creative work.

